

# 1970年代のメダウの学校における方向転換について

— H.エルプグートとH.J.メダウの共著『ある体操学校のポートレート』  
を手掛かりにして —

菅井 京子

## Über die Richtungsänderung in der Medau-Schule der 1970er Jahre Anhand von „Porträt einer Gymnastikschule“ (H. Erbguth und H. J. Medau)

SUGAI Kyoko

Zusammenfassung

Die Gymnastikbewegung, die in den 1920er Jahren anfang, erschien in den 60er Jahren ihre Aufgabe zu erfüllen und ausgereift zu sein. Aber in den 70er Jahren änderte sich der Anblick der Gymnastik. Wir können so ein Beispiel in der Medau-Schule sehen.

Ziel der vorliegenden Arbeit ist es zu klären, was in der Gymnastik der 70er geschah, mit der Medau-Schule und dem Zustand der damaligen Gesellschaft, der die Gymnastik umringt, im Fokus. Dabei soll H. Erbguths und H. J. Medaus „Porträt einer Gymnastikschule“ usw. berücksichtigt werden.

H. Medau fasste in „Moderne Gymnastik. Lehrweise Medau“ 1967 die Erfolge von der Gymnastikbewegung, die er mit anderen neuen Gymnastikschulen vorangetrieben hatte, zusammen. Er hielt die holistische Körpererziehung als Ideal hoch, führte die rhythmische Bewegungserziehung auf der Grundlage der Körperbildung durch und leitete die Medau-Schule. Sie übernahm in den 70er Jahren H. J. Medau, der H. Medaus Sohn, Internist und Kardiologe war. Dabei wurde die Medau-Schule eine Schule für Gymnastik-Ausbildung und Krankengymnastik-Ausbildung. Wir könnten sagen, daß H. J. Medau die H. Medau-Gymnastik entwickelte und dem Zustand und der Forderung der Gesellschaft, besonders der Aufforderung der wissenschaftlichen Rationalität anpasste. Aber unter Berücksichtigung der Tatsache, daß die H. Medau-Gymnastik die Erfolge der Gymnastikbewegung antritt, könnte das eine große Richtungsänderung von der holistischen rhythmischen Gymnastik zur der, der physiologischen Richtigkeit den Vorzug gebenden Gymnastik, sein.

## はじめに

これまでの研究<sup>1), 2), 3)</sup>では、1922年の「芸術的な身体修練のための会議」<sup>4)</sup>から大きく展開し始めた体操改革運動、その成果としての『ドイツ体操』(1935年)<sup>5)</sup>、および、その継承・発展としての『新しい体操——メダウの教授法』(1967年)<sup>6)</sup>についてみてきた。H.メダウの体操がその代表のひとつであると考えられる1960年代の体操において、体操改革運動のキーワードのなかでも特に難解な動きのゲシュタルトツングもようやく具体的な方法とともに明らかになり<sup>7)</sup>、体操改革運動以来の「リズムカルな動きの修練」や「動きづくり」を引き継ぐ豊かな「動きの教育」<sup>8)</sup>に資する体操が、ここで集成されたと考えられる。

しかし、70年代になると、体操はその様相を変化させていった。その一例をメダウの学校でみることができる。そこで、本研究では、H.エルブグートとH.J.メダウの共著『ある体操学校のポートレート』<sup>9)</sup>等を手掛かりにして、メダウの学校と体操を取り巻く当時の社会の状況に焦点を当てて、1970年代の体操に何が起こったのかを明らかにする。

メダウの体操についての研究には、稲垣正浩(1938-2016)、板垣了平(1929- )、C.ディーム(Carl Diem, 1882-1962)、B.ザウルビーア(Bruno Saubier)、B.フレックマン(Barbara Freckmann)の研究<sup>10), 11), 12), 13), 14)</sup>があるが、いずれも、体操改革運動のなかの新しい体操諸派のひとつとして、あるいは1936年のオリンピックベルリン大会や1939年等のリングヤードでのマスマゲームとの関わりで、あるいは1951年に発足した国際新体操連盟との関係でH.メダウの体操について論じているもので、1920年代から1970年代に至る流れのなかで論じたものではなかった。また、本研究で手掛かりとした『ある体操学校のポートレート』は、この流れのなかでのメダウ学校の体操、すなわちH.メダウとその後継者の体操について編年的に論じられているが、特に1970年代に焦点をあてたものではなかった。本研究で

は、1970年代のメダウ学校の体操に焦点をあて、それがひとつの体操の転換期であり、また、どのような転換であったのかを明らかにし、その後の体操、さらには現代の体操を考えるための一助としたい。

## I. H.メダウとメダウの学校について

### 1. H.メダウ(Hinrich Medau, 1890-1974)について

H.メダウは、1890年5月13日に北部ドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州のズグダーシュターペルという村で生まれた<sup>15)</sup>。彼は、国民学校(Volksschule)教師の養成課程を終えた後、1913年にドイツを離れ、リスボンやマドリッドで教鞭をとった<sup>16)</sup>。そして、彼は、R.ボーデ(Rudolf Bode, 1881-1970)の著書<sup>17)</sup>に感動し、ボーデのもとで学ぶために帰国した<sup>18)</sup>。それは1922年で、丁度「芸術的な身体修練のための会議」がベルリンで開かれる年であった<sup>19)</sup>。H.メダウは、若い体育教師としてこの会議に参加したのであるが、そのときのことを後に次のように述べている。「ここで、私は新しい活気のある運動学の主唱者たちに出会った。それまで議論されてこなかった呼吸、リズム、身体と心の問題について、この会議で初めて話し合われた。」<sup>20)</sup>彼は、ボーデの学校を卒業した後<sup>21)</sup>、新しく展開されつつあった動きの教育を、彼の師R.ボーデのもとで7年の間、講演、講習、演技発表を通して広めた<sup>22)</sup>。それは、それまでの知性偏重の、機械的で硬直した体育を改めようとするもので、動きの喜び、全体性、重心、リズム、呼吸等々を重視したものであった<sup>23)</sup>。さらに、体操改革運動の中核を担ったF.ヒルカー(Franz Hilker, 1881-1969)によって1925年に結成されたドイツ体操同盟<sup>24)</sup>において、H.メダウは、その副議長を、またその同盟でのボーデ学校の代表をも務めた<sup>25), 26)</sup>。ボーデが講習、講演旅行で留守のときには、ボーデ学校の校長を代理し、また、ベルリンのツルネン・スポーツ教師中央養成所(Zentrale Ausbildungsstätten der Turn- und Sportlehrer)

の客員講師も務めた<sup>27)</sup>。外国へも招聘され、彼は1928年の夏学期にニューヨークのコロンビア大学で授業を行った<sup>28)</sup>。そこで偶然ボール体操への切っ掛けを得た。バスケット・ボールのゲームを目にし、後にボール体操を考案することになったのである<sup>29)</sup>。そして1929年には、ボーデの学校から独立し、ベルリンのシェーネベルク<sup>30)</sup>に、体操女教師養成所 (eine private Ausbildungsstätte für staatlich geprüfte Gymnastiklehrerinnen)、メダウの学校を設立した<sup>31)</sup>。独立することになった切っ掛けは、ある講習会で、R.ボーデとH.メダウの間に指導に関する口論が起き、収まりがつかなくなり、決別したことであった<sup>32), 33)</sup>。その結果、H.メダウは官職や教師の職をすべて失い、ゼロからの出発となった<sup>34)</sup>。しかし、彼らの間には体操についての基本的な考え方に相違があるわけではなく、H.メダウは生涯R.ボーデを師と仰ぎ、彼の体操の基礎には、ボーデの体操があると、常にボーデの体操への支持を表明していたということであった<sup>35)</sup>。

## 2. メダウの学校 (Medau-Schule) について

学校を創設した後も、H.メダウと彼の妻S.メダウ (Senta Medau, 1908-1971)<sup>36)</sup> は、いろいろな分野の新しい研究成果<sup>37)</sup> を動きの研究へ吸収する努力を惜しまなかった<sup>38)</sup>。これは主に1930-31年の間に行われた。ミュンヘンの医師たちとS.メダウの共同研究で、H.メダウの体操の基礎とされる器官体操 (Organgymnastik) が生まれた<sup>39)</sup>。1936年には、オリンピックベルリン大会で、H.メダウは、オリンピックの輪のシンボルを体操に使うという任務を与えられた<sup>40)</sup>。そして、これが輪の体操を展開する切っ掛けとなった。1939年にはストックホルムでのリングアード<sup>41)</sup> にドイツ代表団を率いて参加した<sup>42)</sup>。学校の名声は上がっていった。戦時中も、メダウの学校は途切れることなく体操の専門教育を続けた<sup>43)</sup>。卒業生は、ヒトラージュゲントの下部組織であるドイツ女子青年同盟 (BDM = Bund Deutscher Mädel) で働くか、野戦病院や負傷者

の療養所で働いた<sup>44)</sup>。彼女らの体操の知識や技能は、リフレッシュ的な体操やリハビリテーションの医療体操として大いに役立ったようである<sup>45)</sup>。しかし、1943年にベルリンのメダウの学校は空襲で破壊され、1945年までの間、学校はプレスラウ (ポーランド南西部の州にある都市) に移された<sup>46)</sup>。そこは、体操祭 (Turnfest) やヒトラージュゲントのスポーツ行事の開催でよく知られた所であった<sup>47)</sup>。戦争の混乱の後、H.メダウは、最初はロシアの占領軍によって、一度逃走した後にはイギリスの占領軍によって捕虜にされた<sup>48)</sup>。家族は、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州の親戚の家に避難し、虜囚のメダウが書いた手紙のなかに示された彼の夢は、メダウ学校の再開であったという<sup>49)</sup>。1948年に、彼は、幸運にも、子どもの頃のキールの友人の援助で、フレンスブルク (デンマークに近いドイツ最北端の港湾都市) のかつての海軍学校の一翼に学校を復活させることができた<sup>50)</sup>。そこには、集まった35人の女生徒たちに十分な練習場、体育館、宿泊所があった<sup>51)</sup>。ここで、体操女教師 (Gymnastiklehrerin) を養成する2年制の課程の他に、新たに女性の医療体操士 (Krankengymnastin) の1年制の課程が開設された<sup>52)</sup>。H.メダウはさらに生徒を勧誘するために体操演技発表グループを連れて、軍隊の古いジープに乗ってドイツ中を積極的に宣伝して歩いたということである<sup>53)</sup>。また、1951年に発足した国際新体操連盟 (Internationale Liga für Moderne Gymnastik) では初代会長を務めた<sup>54), 55)</sup>。1953年のハンブルクでの体操祭 (Deutsches Turnfest) の出演で、メダウの学校は戦前の名声を取り戻し、国内外にそれを広めていった<sup>56)</sup>。テレビ放送の影響もあり、コーブルク (フランケン州の旧東西ドイツ国境の近くにある都市) の市長がメダウに目をとめ、学校の移転に好条件の申し出を提示した<sup>57)</sup>。1954年に、学校はコーブルク市のホーエンフェルス城へ移転された<sup>58)</sup>。ここで、H.メダウは、長く願っていた思いを実現させることができた。それは、全寮制の体操指導者養成所の経営であった<sup>59)</sup>。メダウの学

校と市にはウインウインの状況があった<sup>60)</sup>。メダウの学校は広い建物や敷地を自由に使うことができ、コーブルク市は辺境の都市であっても当時のメダウの学校の評判と魅力を我が物とすることができた<sup>61)</sup>。その後10年以上、メダウ学校の体操演技発表グループは、ヨーロッパ、スカンジナビア、南アメリカの広い地域を旅して回った<sup>62)</sup>。職業専門教育を受けるために、海外からも生徒たちがコーブルクにやって来るようになり、ますます名声を高めていった<sup>63)</sup>。1962年には、H.メダウの研究の後継者と目されて、J.ホラー=フォン・デア・トレンク (Jutta Holler-von der Trenck, 1923? - 1974)<sup>64)</sup> がメダウの学校に招かれた<sup>65)</sup>。そして、1967年に、H.メダウは、S.メダウとJ.ホラー=フォン・デア・トレンクとともに、『新しい体操——メダウの教授法』<sup>66)</sup> を公にした。

## II. H.メダウの体操とそれを取り巻く社会の状況について

### 1. H.メダウの体操とその特徴のひとつである器官体操について

1967年に出版された『新しい体操——メダウの教授法』のなかで、H.メダウは、自分の体操を「ダンスや、ましてやショーではなく」、体操改革運動初期の「純粹体操 (Reine Gymnastik)」<sup>67)</sup> を引く継ぐものであると述べている<sup>68)</sup>。それは、20年代当時の治療体操 (Heilgymnastik) やスポーツ的目的体操 (sportliche Zweckgymnastik) と区別して定義されたもので、そこでは常に「からだづくり (Körperbildung)」とよりよい質を求める「動きづくり (Bewegungsbildung)」が目指されたという<sup>69)</sup>。

もともと体操改革運動は、自然科学、特に生理・解剖学に基づく、幾何学的で形式的な部分運動の組み合わせであったそれまでの体操に対する批判から始まったものであった<sup>70), 71)</sup>。体操改革運動を牽引したF.ヒルカーは、「人間を生命ある者として、より内的な法則性から作用するリズムカルな存在と見なすことが、まず一番に大事であ

る。』<sup>72)</sup> と述べている。彼によって1925年に結成されたドイツ体操同盟は、体操改革運動のなかで重要な役割を果たした組織<sup>73)</sup> であるが、この同盟の規約には、身体修練の理想とするところが次のように示されている。「この同盟の目的は、体操の奨励、普及そして擁護である。体操とは、身体をその建設的でいきいきとした力において発育、発達させ、そしてその身体を単に身体的な価値だけでなく、心的、精神的な価値の担い手とするような身体修練である。』<sup>74)</sup> この規約には、F.ヒルカーの他に賛同者たちの署名があるのであるが、ボーデ学校を代表して署名しているのはH.メダウであった。H.メダウも、このような身体修練の理想を掲げて、ホリスティックなリズム体操を目指し、全寮制の体操学校<sup>75)</sup> を運営したものである。

具体的な体操について、H.メダウは、『新しい体操——メダウの教授法』のなかで、体操の拠となる3つの柱を挙げている。「健康」、「よい形態と姿勢」、「目的に適した洗練された動き」である<sup>76)</sup>。彼は、この「よい形態と姿勢」を「からだづくり」の課題としているのであるが、この課題は、呼吸と姿勢を組み合わせた器官体操 (Organgymnastik)<sup>77)</sup> で行われ、これを土台に「目的に適した洗練された動き」すなわち「動きづくり」の課題<sup>78)</sup> が展開されるとしている<sup>79)</sup>。彼は、この器官体操があつてこそ、リズムカルな動きづくりが可能になると主張し、器官体操を基礎として最も重要なものと特に強調し<sup>80)</sup>、彼の体操の特徴のひとつとしている。器官体操を重要視するようになった切っ掛けは、第2次世界大戦後に人々の間に蔓延した病気や身体の衰弱を目の当たりにしたことであったという<sup>81)</sup>。前述したように、その頃に、メダウの学校では、通常の体操教師養成課程の他に、新たに医療体操士の養成課程が開設されている。

H.メダウは、新しい体操の諸派<sup>82)</sup> とともに体操改革運動を推進してきた<sup>83)</sup>。彼は、器官体操を体操の基礎的な研究として展開したが、彼の最終目標は常により繊細な動きの質を問題に

する「動きづくり」におかれている<sup>84)</sup>。すなわち、彼の体操は体操改革運動を引き継いだ体操だということである。H.メダウ自身が認めているという通り<sup>85)</sup>、彼の体操は、基本的にはR.ボーデの動きの3分節<sup>86)</sup>等の理論を受け継いだリズム体操なのである。H.メダウは、グーツムーツ (J.C.GutsMuths, 1759-1839) やリング (P.H.Ling, 1776-1839) の体操を新しい (modern) と評価し、特に未完の美的体操を含むリングの体操の構想を高く評価した<sup>87)</sup>。しかし、リングの後継者たちによって伝えられ、後の整形外科的療養体操に用いられた「ぞっとするような運動」<sup>88)</sup>の光景を目の当たりにし、彼は、R.ボーデとともに、新しい (neu) 体操、有機的な動きの普及に努めた。リングに由来する衛生的な体操 (Hygienische Gymnastik) の目的に拘束された部分運動と新しい体操諸派が追求する有機的な全身運動の間には長い間断絶があったと、H.メダウはいう<sup>89)</sup>。そのようななかで、彼は、器官体操の研究を通して、この断絶を繋ぐ努力をした<sup>90)</sup>。そして、彼はこの器官体操を含む彼の体操を「新しい体操 (Moderne Gymnastik)」<sup>91)</sup>と名づけた。それは、60年代に体操協会や公教育の学校から絶大な支持を得た<sup>92)</sup>。

## 2. 1970年代の体操を取り巻く社会の状況について

当時の体操の定義について、1971年の「体育の科学」に掲載された「体操を分析する」という特集のなかで、岸野雄三 (1918-2001) は次のように述べている。「先年開催された体育術語検討の国際会議でも、『体操 (Gymnastik)』をあまり拡大解釈することは不相当であるとの決定をみた。そこで体操とは、生理学的目的で行われる各種の準備運動や補強運動、あるいは動きの基本を身につけるリズム体操などを中心としたものとして、狭義に解されている。』<sup>93)</sup>

ここで岸野がいう体育術語検討会議とは、1963年にオーストリアで行なわれたもの (Internationale Arbeitstagung für Terminologie der

Leibesübungen <des Sports> vom 14. bis 19. Oktober 1963) である。その報告書<sup>94)</sup>の序言では、急速に進む社会の科学・技術化や国際化に対応するには、体育・スポーツで用いる概念の統一が必要であることが述べられている。体操概念の検討グループの報告には、まず、次のような説明がある。「体操、この定義は、誤解されやすく、大変翻訳の難しいものであることが明らかになった。体操の課題としての『からだづくりと動きづくり (Körper- und Bewegungsbildung)』は、確かに、ドイツ語圏においては1934年<sup>95)</sup>以来通例であり、正確に定義されている。しかし、この表現は、術語として一義的に限定しうるように翻訳されえない。『動きの空間的・時間的秩序』の追求が、体操のひとつの独特な関心事であり、スポーツ<sup>96)</sup>とは明らかに異なるという確信に私たちは至った。』<sup>97)</sup>そして、最終報告では、次のようにまとめられている。体操は、技能や成果・記録を目指すのではなく、「動き自体を問題にする身体運動」であり、「生理学的な意図において準備・補強すること、あるいは芸術的、音楽的、美的な観点から行われること」である<sup>98)</sup>。また、ここでは、「体操」という言葉は「あらゆる種類の身体運動 (alle Arten von Leibes- ((Körper-)) Übungen)」という意味で用いることはできないので、狭い意味で用いることを勧めるとも述べられている<sup>99)</sup>。これは、「からだづくりと動きづくり」の「づくり (Bildung)」を大きく捉えると、育成とか教育の意味合いが強くなり、ほとんど体育と同じ意味になることを避けようとするもので、より狭く、具体的に定義しようとするものであると思われる。そして、この体育術語検討会議では、「からだづくり」を生理学的目的で行なわれる各種の準備運動や補強運動とし、「動きづくり」を動きの基本を身につけるリズム体操等を中心としたものとしたのである。

しかし、この定義では、「からだづくり」と「動きづくり」が「あるいは (oder)」でつながり合われているので、当然、体操は分化の道を辿ることになった。この会議の体操概念検

討グループの一員であったW. ボーデは当時の体操概念の交錯を整理しようと1971年に発表した論文のなかで、「からだづくりと動きづくり (Körper- und Bewegungsbildung)」について、次のように述べている。体操改革運動では、からだづくりと動きづくりが一貫して同時に求められてきたのであるが、今や、「この2つが分割され、それぞれの極端な変種を求めるような動向がみられる。」<sup>100)</sup> また、体操 (Gymnastik) を定義し直したこの1963年の会議では、他に、基本体操 (Grundgymnastik)、学校体操 (Schulgymnastik)、コンディショニング体操 (Konditionsgymnastik)、補償体操 (Ausgleichsgymnastik)、芸術体操 (Künstlerische Gymnastik)、ダンス的体操 (Tänzerische Gymnastik) 等も定義された<sup>101)</sup>。これらの体操の定義を受けて、体操は一気に多様化し、例えば、表出体操 (Ausdrucksgymnastik)、リズム体操 (Rhythmische Gymnastik)、美的体操 (Ästhetische Gymnastik) 等の他に、補償体操 (Ausgleichsgymnastik)、養護体操 (Pflegerische Gymnastik)、機能体操 (Funktionelle Gymnastik)、呼吸体操 (Atemgymnastik)、医療体操 (Krankengymnastik)、保養体操 (Kurgymnastik)、コンディショニング体操 (Konditionsgymnastik)、トレーニング体操 (Trainingsgymnastik) 等々が注目されるようになった<sup>102), 103)</sup>。特に生理学的目的で行われる体操の隆盛がみられ、あたかも1920年代の体操改革運動の初期の状況<sup>104)</sup>、あるいはそれ以前の体操の状況を思い起こさせるものがあった。

また、この頃、ドイツでは、体操よりもスポーツに人々の関心が集まった。1972年のオリンピックミュンヘン大会<sup>105)</sup>を契機にドイツでも競技スポーツが盛んになったのである<sup>106)</sup>。西ドイツは東ドイツを意識し、国を挙げてスポーツの強化に取り組んだ<sup>107)</sup>。才能ある者を発掘し強化しようと、学校ではそれまでの体育 (Leibeserziehung)

から学校スポーツ (Schulsport) に舵が切られた<sup>108)</sup>。そこでは、いろいろなスポーツ種目の総和において包括的なからだづくりが構想された<sup>109)</sup>。体操については、もし学校に体操教師がいる場合には選択科目として授業されたが、そうでなければスポーツ種目の準備運動としてのウォーミングアップ体操や補強としてのコンディショニング体操が、しかも生徒たちの自己管理で行われた<sup>110)</sup>。大学にも変化が起き、スポーツ科学が独立した専門分野となった<sup>111)</sup>。体育研究所はスポーツ科学研究所に改名され、それと同時に、研究依頼を伴う多くの求人もなされた<sup>112)</sup>。その研究成果は、書物から日刊新聞の記事にまでおよび、スポーツ選手だけでなく一般市民の広い層に行き渡り、フィットネス・トレーニングが大流行した<sup>113)</sup>。このように、この時期、特に生理学的なトレーニング体操の隆盛が目立った。岸野も、スポーツ科学において、自然科学的領域、特にスポーツ生理学が特別な位置を占めていることを指摘している<sup>114)</sup>。すなわち、スポーツ生理学は、この時期スポーツ科学の女王 (the queen of sport sciences)<sup>115)</sup>として君臨していたのである。

次にリズム体操に打撃を与えたのがエアロビクス・エクササイズであった<sup>116)</sup>。これは筋収縮を過度に強調するもので、身体的にも精神的にも緊張の増大を招き、負傷の危険も大きくなった。それを補うためにストレッチングも盛んになった<sup>117)</sup>。リズム体操は、このような展開のなかでなす術もなく留まり、大学でもほんの少ししか授業されなくなり、その他の学校ではほとんど教えられなくなった<sup>118)</sup>。メダウの体操やストレッチングに似たメダウの器官体操も同様であった。長年、体操協会や学校から支持されてきたメダウの「新しい体操 (Moderne Gymnastik)」は、もはや新しいとは見なされなくなった<sup>119)</sup>。

### Ⅲ. メダウの学校における方向転換について

#### 1. 指導者の世代交代と学校経営の危機について

1970年代のこのような体操の状況のなかで、メ

ダウの学校では世代交代がなされた。1971年1月に長期におよぶ闘病の後にS.メダウが亡くなり、1974年の初めにH.メダウも亡くなった<sup>120)</sup>。その後、病気であったJ.ホラー=フォン・デア・トレンクも状態が悪化し、その同じ年の5月に亡くなった<sup>121)</sup>。そして、1974年にメダウの学校を引き継いだのが、H.メダウの一番末の息子であり、内科医、心臓病専門医であるH.J.メダウ(Hans Jochen Medau, 1939-)とその妻で体操教師であるI.メダウ(Ingrid Medau)であった<sup>122)</sup>。

リズム体操を継承発展させてきた創設者たちの相次ぐ死去の後、メダウ学校では、いろいろな困難を乗り越えねばならなかった。日常の体操授業については後継の教師たちが育っており問題はなかったが、教育の総まとめとしての卒業試験に関する授業等については、H.メダウ、S.メダウ、J.ホラー=フォン・デア・トレンクを継ぐ者がおらず、H.J.メダウは困窮した<sup>123)</sup>。その状況を救ったのが、H.エルプグート(Hildegard Erbguth)<sup>124)</sup>であった。しかし、問題はそれだけではなく、これはメダウの学校に限ったことではないのであるが、当時、スポーツを得意としない体操教師は教職の試験に合格することが大変難しくなっていた<sup>125)</sup>。さらに、1976年に文部科学大臣会議で国家試験によって認められた教師、すなわち体操教師ではなくスポーツ教師にのみ学校での教職が許されるということが決定された<sup>126)</sup>。この公教育の学校での体操教師の職(教職)の喪失は、メダウ学校の卒業生に大きな打撃を与えた。また、この時期の競技スポーツやエアロビクス・エクササイズの隆盛も、彼女たちにとっては逆風となった。メダウ学校は、たちまち窮地に追い込まれた。

## 2. 医療体操指導者養成課程の導入について

H.J.メダウは、メダウの学校の卒業生の就職口を求めて、余暇施設、スポーツクラブ、セラピーやリハビリテーションの病院、旅行会社等を巡り奔走した<sup>127)</sup>。そのような折に、彼は、あ

る行政官庁から「なぜメダウの学校は、(需要の多い)例えば医療体操士の養成に切り替えないのか」との問いも投げかけられた<sup>128)</sup>。彼は、一時は学校スポーツの指導者養成を目指していたが、結局それを断念し、リズム体操の指導者養成を継続しながら、医療体操(Krankengymnastik)の指導者養成の導入を決意した<sup>129)</sup>。彼が医者であったことが幸いし、カリキュラムや教師等について短期間ですべての条件を整えることができた<sup>130)</sup>。また、彼は、複数専門教育のために校舎の増築や新築の必要にも迫られたが、1978年に学校を有限会社(GmbH = Gesellschaft mit beschränkter Haftung)にすることによって、その財政的な問題も切り抜けた<sup>131)</sup>。そして、1979年にメダウの学校は、体操と医療体操(後に理学療法(Physiotherapie))といわれるようになる<sup>132)</sup>の学校になった<sup>133)</sup>。それまで行われていた演技発表も出場は控えられ、ドイツの体操祭(トゥルンフェストやギムナエストラダ)、あるいは外国での大きなフェスティバル等に限られるようになった<sup>134)</sup>。

H.J.メダウは、「メダウの学校の85年」<sup>135)</sup>のなかで、次のように述べている。「運動に関する病理について知っているだけでなく、自身が体操、ダンス、スポーツを実際に体験していることは意味のあることである。理学療法を学ぶことは、体操を学ぶことから利を得るだけでなく、その逆もまた真である。機能について医学的な教育を受けた体操教師は素早く確実に専門知識を伝え、健康的で生理学的に正しい動きによって動きの創造性を教えることができる。」<sup>136)</sup> また、彼は、「リズム体操は科学的に検証されねばならない」<sup>137)</sup>とも主張した。そして、体操を科学的に構想し直す必要を感じ、2つの専門教育、リズム体操と医療体操を強く結びつけようと、研究を始めた<sup>138)</sup>。その拠となったのがスポーツ医学であった。H.J.メダウは、1987年に、ギーセン大学のスポーツ医学研究所でスポーツ医学の大学教授資格を得た<sup>139)</sup>。

## おわりに

H.メダウは、1920年代から新しい体操の諸派とともに推進してきた体操改革運動の成果を『新しい体操——メダウの教授法』(1967年)で集大成した。彼は、ホリスティックな身体教育の理想を掲げ、「からだづくり」を土台にリズムカルな「動きの教育」を実践し、メダウの学校を運営してきた。

1970年代になると、体操は様変わりすることになった。まず、それに先だって開催された体育・スポーツ術語の国際会議で、体操は、技能や成果・記録を目指すのではなく、動き自体を問題にする身体運動であり、生理学的な意図において準備、補強すること、あるいは芸術的、音楽的、美的な観点から行われることと定義された。この定義を受けて、体操は一気に分化し、多様化していくことになった。特に生理学的目的で行われる体操が注目されるようになった。また、体操を取り巻く社会の状況も大きく変化した。科学を背景にエアロビクス・エクササイズ等のフィットネス・トレーニングが隆盛を極め、リズム体操に取って代わる勢いであった。さらに、競技スポーツも盛んになり、学校でも、体育からスポーツへと考え方が変化した結果、体操教師は公教育の学校での職を失った。メダウ学校は、たちまち窮地に追い込まれた。

このような状況のなかで、リズム体操を中核とする教育・指導方針を継承発展させてきた創設者たちの相次ぐ死去の後、メダウ学校は、H.メダウの息子であり、内科医、心臓病専門医であるH.J.メダウによって引き継がれ、リズム体操と医療体操の指導者養成課程を併設する学校となった。彼は、スポーツ医学的な見地から医療体操を押し出すことによって、学校経営の危機を乗り越えた。H.J.メダウに率いられたメダウの学校は、確かに、体操を社会の状況や要求、特に科学的合理性の要請に適応させ、創設者たちの仕事を発展させたといえるであろう。しかし、H.メダウの体操が体操改革運動の成果を引き継ぐもので

あるということから考えると、ここに至ってメダウの学校は、それまでのホリスティックなリズム体操から、生理学的な正しさを最優先にする体操に大きく方向転換したといわざるをえないのではないだろうか。

## 注および引用・参考文献

- 1) 拙稿、ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について、スポーツ史研究 第24号、1-14頁、2011年。
- 2) 拙稿、『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』に果たしたルードルフ・ボーデの貢献について、スポーツ史研究 第26号、1-16頁、2013年。
- 3) 拙稿、体操改革運動の後継および発展としてのメダウの体操体系について、びわこ成蹊スポーツ大学紀要 第3号、97-104頁、2005/2006年。
- 4) Tagung für künstlerische Körperschulung 5.-7. Oktober 1922 in Berlin.
- 5) Hilker, F., Deutsche Gymnastik, Bibliographisches Institut, 1935.
- 6) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der Trenck, J., Moderne Gymnastik. Lehrweise Medau, Pohl-Druckerei und Verlagsanstalt, 1967.
- 7) 拙稿、1960年代の体操における動きのゲシュタルトウングの意味と方法について、スポーツ史学会第31回大会発表抄録集、58-59頁、2017年。
- 8) Bernett, H. (Hrsg.), Terminologie der Leibeserziehung 4. neu bearbeitete Aufl., Verlag Karl Hofmann, 1968, S.23.によると、「動きの教育 (Bewegungserziehung)」という用語は、1940年代にF.ヒルカーによって導入されたといわれている。ちなみに、Hilker, F., Deutsche Gymnastik, a.a.O.では、「動きの修練 (Bewegungsschulung)」と「動きづくり (Bewegungsbildung)」と

- いう用語が使われていた。
- 9) Erbguth,H. und Medau,H.J., Porträt einer Gymnastikschule. Entstehung und Entwicklung rhythmischer Gymnastik am Beispiel der Medau-Schule, Verlag Karl Hofmann, 1991.
  - 10) 稲垣正浩、新体操、岸野雄三編『最新スポーツ大辞典』、大修館書店、1987年、451頁。
  - 11) 板垣了平、体操論、アイオーエム、1990年、38-39・57-65頁。
  - 12) Diem, C., Weltgeschichte des Sports und der Leibeserziehung, J.G.cotta'sche Buchhandlung Nachf. GmbH,1960, S.646-647 und 1009.
  - 13) Saurbier,B., Geschichte der Leibesübungen 9.Aufl.,Wilhelm Limpert-Verlag GmbH, 1976, S.153.
  - 14) Freckmann,B., Wesen und Formen der Gymnastik, Ueberhorst,H. (Hrsg.), Geschichte der Leibesübungen Band 3/2, Bartels und Wernitz, 1981, S.1008-1025.
  - 15) Erbguth,H. und Medau,H.J., a.a.O., S.31.
  - 16) Rothenberg,G., Hinrich Medau zum 75. Geburtstag, Leibesübungen 5, S.3., 1965.
  - 17) ebd., S.4. および Erbguth, H. und Medau, H. J., a. a. O., S. 34-35. では『リズムと身体教育』(Bode, R., Rhythmus und Körpererziehung, Verlag Eugen Diederichs, 1923.) と書名が挙げられているが、これは出版年が1923年といわれているものである。書籍として出版される前の論文かと思われる。
  - 18) Rothenberg,G., a.a.O., S.4.
  - 19) Erbguth,H. und Medau,H.J., a.a.O., S.37.
  - 20) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.57.
  - 21) Rothenberg,G., a.a.O., S.4. に、さらにミュンヘン大学やベルリン大学で3年半学んだことが記されている。
  - 22) ebd.
  - 23) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.57.で、H.メダウは、ボーデの体操について、次のように述べている。「彼(ボーデ)は、学校体育の知性偏重で、機械的で硬直した状態に対して、理論と実践において、動きの喜びを対置した。」また、同じ頁で、H.メダウは、ボーデの体操を理解するためのキーワードとして、全体性(Ganzheit)、重心(Schwerpunkt)、リズム(Rhythmus)、呼吸(Atem)を挙げている。
  - 24) 拙稿、ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について、前掲、6-9頁。
  - 25) Deutscher Gymnastikbund e.V., Mitteilungen des Deutschen Gymnastikbundes, Gymnastik Jg. 1., S.25., 1926.
  - 26) Bode,U.(Hrsg.), 100 Jahre Bode Schule 100 Jahre Gymnastik, Festschrift zum hundertjährigen Bestehen der Bode Schule 1911-2011, Trochos GmbH, 2011, S13.
  - 27) Erbguth,H. und Medau,H.J., a.a.O., S.63-64.
  - 28) Rothenberg,G., a.a.O., S.4.
  - 29) ebd.
  - 30) [www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe\\_finall.pdf](http://www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe_finall.pdf), 85 Jahre MEDAU-SCHULE, S.4., 2018.6.13.閲覧
  - 31) Rothenberg,G., a.a.O., S.4.
  - 32) Bode,U.(Hrsg.), a.a.O., S.14.では、次のように記述されている。「5・6月の春の講習会で口論になり、R.ボーデとH.メダウの間に不和が生じる。切っ掛けは、位相区分(動きの3分節)についての議論である。ボーデは、即刻、メダウにボーデの名で体操を教えることを禁ずる。彼らは、以後別々の道を進むことになる。1927年に出された声明は次のようなものである。『ボーデ氏とメダウ氏の共同研究は、1929年7月31日をもって解消される。ミュンヘンのボーデ学校は以後も同様

- にボーデ氏によって続けられる。ベルリンの学校は、メダウ氏の名前に変更して独立させる。詳細はそれぞれの学校のパンフレットに記載されている。』]
- 33) Erbguth, H. und Medau, H.J., a.a.O., S.86-87.によると、ミュンヘンのボーデ学校の生徒とベルリンのボーデ学校の生徒が集まって行われた1929年夏の継続教育講習会で、双方の生徒たちの間に衝突が起こった。切っ掛けは、ミュンヘンの生徒たちがボーデの妻E. ボーデ (Elly Bode, 1886-1983) に教わったという (実際にそうであったか、生徒たちが誤解したのかは定かではない) 歩く動きの位相区分 (3分節) について、ベルリンの生徒たちが抗議した。それが、居合わせたR. ボーデとH. メダウの激しい口論になり、収まりがつかなくなり、二人は決別した。H. メダウは、何度も話し合いを求めたが実現しなかった。第2次世界大戦終結の4年後に和解されたが、二人の関係は元のようにもどらなかつたということである。
- 34) ebd., S.87.
- 35) ebd.
- 36) Rothenberg, G., a.a.O., S.4. によると、S. メダウは、1908年1月20日ベルリンに生まれた。彼女の母は、スウェーデン人であったので、彼女はスウェーデン体操とともに育った。美容体操やジュネーブのダルクローズ (Émile Jaques-Dalcroze, 1865-1950) の所で学んだことが、彼女の生涯に大きく影響を与えた。ミュンヘンのボーデの学校で、彼女は5学期の養成の後、卒業試験を受けた。そして、1930年にベルリンのメダウの学校で働くことになった。1948年以来、メダウの学校の協同経営者である。
- 37) ebd. ここでは、H. メダウが影響を受けた人物として、医師、ヴァイネルト (Weinert)、J.L. シュミット (Johannes Ludwig Schmitt) とF. リヒター (Frederike Richter)、バイオリンの名手 S. エーバーハルト (Siegfried Eberhardt)、運動研究者L. ベーメル (Leopold Böhmer) とG. トウン (Graf Thun) 等の名前が挙げられている。
- 38) ebd.
- 39) ebd.
- 40) ebd.
- 41) リンギアードは、岸野雄三編、最新スポーツ大事典、大修館書店、1987年、726頁によると、リング生誕を記念して行われる運動祭典のことである。
- 42) Erbguth, H. und Medau, H.J., a.a.O., S.134.
- 43) ebd., S.140.
- 44) ebd.
- 45) ebd.
- 46) [www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe\\_finall.pdf](http://www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe_finall.pdf), a.a.O., S.4.
- 47) Erbguth, H. und Medau, H.J., a.a.O., S.141.
- 48) [www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe\\_finall.pdf](http://www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe_finall.pdf), a.a.O., S.4.
- 49) ebd.
- 50) ebd.
- 51) ebd.
- 52) ebd.
- 53) ebd.
- 54) Rothenberg, G., a.a.O., S.7.
- 55) 岸野雄三編、最新スポーツ大事典、前掲、451頁。
- 56) [www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe\\_finall.pdf](http://www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe_finall.pdf), a.a.O. S.4.
- 57) ebd.
- 58) ebd.
- 59) ebd.
- 60) ebd.
- 61) ebd.
- 62) ebd.
- 63) ebd.
- 64) Erbguth, H., Medau, H.J., a.a.O., S.187.によると、J. ホラー＝フォン・デア・トレンクは、専門教育をベルリンのI. デプナー

- (Irmela Laves-Doebner)のもとで受け、その傍ら演劇の勉強もし、現代音楽にも取り組んだ。卒業後、就職。その後、メダウ体操学校で協力するように要請を受けた。そのときには、すでに40歳にならんとしていた。また、Rothenberg,G., a.a.O., S.5.によると、I.デブナーは、メダウ学校の創設の時期にメダウの助手を努めていた人物で、『新しい体操——メダウの教授法』の序文なかでメダウが名前を挙げて謝辞を述べている人物である。
- 65) Erbguth,H., Medau,H.J., a.a.O., S.187.
- 66) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O.
- 67) F.ヒルカーの著書に同名のものがある。Hilker,F., Reine Gymnastik,2.Auflage., Max Hesses Verlag, 1926, S.21-22. und S.32. に、この純粹体操の定義がある。それは、トゥルネンやスポーツで行われる体操は、それらの技能や成績・記録の向上のための身体修練で、このような体操を応用体操と呼ぶのに対して、純粹体操は、より内的な生命現象の自然な経過を重視するものであるという。この純粹体操では、呼吸や循環等の内的な事象に、身体の基礎づくりのために骨組みや筋肉に、身体の個々の部分の機能向上よりもその相互作用の調和に、緊張と解緊のリズミカルな交替に、そして繊細に感じ取られる動きの経過に注意が向けられるとされている。
- 68) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.46.
- 69) ebd., S.45-46.
- 70) 岸野雄三、体育史講義、大修館書店、1984年、109頁。
- 71) 板垣了平、前掲書、10頁。
- 72) Hilker,F., Neue Aufgaben der Körpererziehung, In: Künstlerische Körperschulung, 3. erweiterte Aufl., Ferdinand Hirt, 1926, S.18.
- 73) 拙稿、ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について、前掲、6-9頁。
- 74) Deutscher Gymnastikbund e.V., Satzung, Gymnastik Jg.1.Nr.1/2.,S.22.,1926.
- 75) www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe\_finall.pdf, a.a.O., S.4.
- 76) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.112.
- 77) ebd., S.63-70. で、S.メダウは、器官の機能を高めるもの、例えばエアロビクス・エクササイズのように心肺機能を高めるものを器官修練 (Organschule) といい、それとは区別して機能を高めるための前提になるものを器官体操と捉えているという。そして、それを「呼吸運動により胴体を内から動かす (胴体内部の) 運動」で、「腹腔、胸腔にある諸器官にいろいろな強さや質の圧力を加え、鬱血を取り除き、よい刺激を与え、器官の機能の調整を図る」ものであるとしている。また、ebd., S.138-143.では、J.ホラー＝フォン・デア・トレックが、器官体操の具体的な運動として、休息・弛緩・静止を主要部分とする課題、動きに伴う弛緩運動、受動的 (重力を利用した) 伸展の姿勢による運動、特別な姿勢での呼吸運動、そしてそれらを動きと結びつけて行う運動の例を挙げている。
- 78) ebd., S.120-144. に、動きづくりの課題として次のようなものを取り上げられている。基本運動 (Grundformen der Bewegung)、動きの発展 (Bewegungsentwicklung)、空間における動き (Bewegung im Raum)、動きのゲシュタルトウングとダンス (Bewegungsgestaltung und Tanz) 等々。
- 79) Rothenberg,G., a.a.O., S.5.
- 80) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.46.
- 81) ebd. H.メダウは次のように述べている。「第2次世界大戦後、私たちは人々の間に大規模に現れた姿勢や動きの衰弱に気づいた。雑誌や新聞は病氣や衰弱のニュースでいっば

いであった。私たちは、もはや動きの教育にのみ専念することは許されなかった。首や腰や足や脊柱の衰弱、呼吸や循環の衰弱への対応を迫られた。」

- 82) 拙稿、ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について、前掲、6-7頁に示したように、新しい体操諸派としては、メンゼンディーク (Bess Mensendieck,1864-1957)、ラバン (Rudolf von Laban,1879-1958)、ボーデ (Rudolf Bode,1881-1970)、カルマイヤー (Hedwig Kallmeyer,1884-1948)、ギンドラー (Elsa Gindler, 1885-1961) の他、多くの名前を挙げることができる。
- 83) 拙稿、体操改革運動の後継および発展としてのメダウの体操体系について、前掲、97-104頁。
- 84) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.48.
- 85) Erbguth,H. und Medau,H.J., a.a.O., S.87.
- 86) Bode,R., Rhythmische Gymnastik 2. erweiterte Aufl., Wilhelm Limpert-Verlag, 1957, S.23.で、動きの3分節は次のように説明されている。「あらゆる動きは、3分節された経過をとる。すなわち、用意の動き (Ausholbewegung) = 上拍 (Auftakt)、主の動き (Entladung) = 強調 (Betonung)、納めの動き (Auslaufbewegung) = 下拍 (Abtakt) である。」
- 87) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.34.
- 88) ebd., S.35.
- 89) ebd.
- 90) ebd., S.36.
- 91) Moderne Gymnastikの訳語としては、次のようなものが挙げられる。稲垣正浩、前掲書、451頁に、「モダン体操」、板垣了平、前掲書、39頁に「新しい体操」等。H.メダウは、グーツムーツやリングの体操の構想を「近代的、モダンな、新しい (modern)」

と評価し、彼らの構想を含めたものとして自分の体操を命名したと思われる。しかし、メダウの体操の中心はあくまで体操改革運動の成果である「新しい (neu)」体操であると理解できるので、本研究では、広い意味の「新しい (modern und neu)」を用いて「新しい体操」と訳した。

- 92) Erbguth,H. und Medau,H.J., a.a.O., S.210.
- 93) 岸野雄三、近代体操史概観、体育の科学 第21巻3号、170頁、1971年。
- 94) Tscherne,F. (Hrsg.), Zur Terminologie der Leibesübungen, Österreichischer Bundesverlag, 1964.
- 95) 拙稿、『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』に果たしたルードルフ・ボーデの貢献について、前掲、11頁に示したように、1933年に、それまで体操改革運動を推進してきたドイツ体操同盟はナチス (国家社会主義) の政府によって解散させられ、また他の多くの体育・スポーツの組織も解散させられて強制的にひとつの新しい団体、すなわちドイツ帝国体育・スポーツ・体操教師連盟に統合された。F.ヒルカーは、その連盟で自発的に体操部門の事務長として働き、1935年に彼の体操研究の集約である『ドイツ体操』を著した。また、同じ1935年に、この連盟の叢書の第1号として同名の『ドイツ体操』が出版されている。本文中の1934年は、丁度この間の年である。この年に具体的に何が起こったのかは現在のところわからないが、ここでいわれている「からだづくりと動きづくり」はF.ヒルカーやドイツ体操同盟が中心になってまとめられた体操改革運動の考え方であると思われる。
- 96) Tscherne,F. (Hrsg.), a.a.O., S.64.で、スポーツは次のように定義されている。技能の追求、個人やチームの技能競べを追求することによって、そして、その目的のために伝統的に取り決められたあるいは規格化されたやり方や動きによって、おおむね特徴づけられる

- ような身体運動の形態である。遊戯的な、あるいは競技的な考え方で行われる。それぞれのスポーツ種目は、社会的あるいは複合的な観点から専門化されたそれぞれの組織によって決められた規則に従って行われる。歴史的にはイギリス起源である。
- 97) ebd., S.68.
- 98) ebd., S.72.
- 99) ebd.
- 100) Bode, W., Systematik und Stoffgliederung der Gymnastik im Rahmen des Sports, Leibeserziehung 7., S.233., 1971.
- 101) Tscherne, F. (Hrsg.), a.a.O., S.68-69.
- 102) Bode, W., a.a.O., S.234. W.ボーデは、この論文のなかで、体操を目的や内容等から分類して、呼吸体操、コンディショニング体操、補償体操、養護体操、機能体操、医療体操、保養体操、表出体操、リズム体操、美的体操などの例を挙げている。
- 103) Gutsche, K.-J. und Markmann, I., Zur Standortbestimmung der Gymnastik, Turnen und Sport 7., S.166-169., 1978. この論文のなかで、K.-J.ゲーチェとI.マルクマンは、動きづくりとからだづくりの体操を目的別に次のように3つに分類している。健康に資するもので、積極的な予防を目的とする養護体操、ゲシュタルトウングに資するもので、創造性の育成を目的とするリズム体操、そして、技能に資するもので、運動技能の前提条件となる体調を整えるトレーニング体操である。
- 104) 拙稿、ドイツ体操同盟の成立に果たしたF.ヒルカーの役割について、前掲、6-8頁。体操改革運動の初期には、医療体操、機能体操、保健体操 (Pflegerische Gymnastik) の名称も挙がっている。
- 105) Krüger, M., Einführung in die Geschichte der Leibeserziehung und des Sports 2. neu bearbeitete Aufl., Verlag Karl Hofmann, 2005, S.202-204.
- 106) Erbguth, H. und Medau, H.J., a.a.O., S.208.
- 107) ebd.
- 108) ebd.
- 109) ebd.
- 110) ebd., S.209.
- 111) ebd.
- 112) ebd.
- 113) ebd. その流れのなかで、体操としてはジャズ体操とスキー体操が流行った。
- 114) 岸野雄三、スポーツ科学とは何か、岸野雄三・水野忠文・朝比奈一男編著、スポーツの科学的原理、大修館書店、1977年、110頁。
- 115) Brown, R.C. and Cratty, B.J., New Perspectives of Man in Action, Prentice-Hall, Inc., 1969, p.171.
- 116) Erbguth, H. und Medau, H.J., a.a.O., S.210.
- 117) ebd.
- 118) ebd.
- 119) ebd.
- 120) ebd., S.211.
- 121) ebd.
- 122) [www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe\\_finall.pdf](http://www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe_finall.pdf), a.a.O., S.5.
- 123) Erbguth, H. und Medau, H.J., a.a.O., S.221-222.
- 124) ebd., S.172 und 221-222. H.エルプゲート (Hildegard Erbguth) は、本研究で手掛かりとした『ある体操学校のポートレート』の著者のひとりであるが、彼女は1954年のコーブルクへの学校移転の前からメダウの学校の教師であったようである。1957年にメダウの学校を離れ、新たに教師養成課程を修め、基礎学校の教師を経験した後、フランクフルト大学教育学部でスポーツ教師養成に携わっていたのであるが、メダウの学校を引き継いだH.J.メダウの依頼を受けて、卒業試験に関する授業、体操理論 (Theorie der Gymnastik)、教育学 (Pädagogik)、教授法 (Didaktik) や授業論 (Unterrichtslehre) 等を援助することに

なった。

- 125) ebd., S.206.
- 126) ebd., S.225.
- 127) ebd., S.225-226.
- 128) ebd., S.226.
- 129) ebd., S.226-227.
- 130) ebd.
- 131) ebd., S.227.
- 132) [www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe\\_final1.pdf](http://www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe_final1.pdf), a.a.O., S.5.
- 133) Erbguth,H. und Medau,H.J., a.a.O., S.227.
- 134) ebd., S.235.
- 135) [www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe\\_final1.pdf](http://www.medau-schule.de/images/corporate/Pressemappe_final1.pdf), a.a.O., S.1-8.
- 136) ebd., S.5.
- 137) Erbguth,H. und Medau,H.J., a.a.O., S.237.
- 138) ebd.
- 139) ebd.

(2019年3月21日受付)  
(2019年10月7日受理)